

国語

注 意

- 1 問題は **1** から **4** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
。や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 蓋にラベルを貼る。
- (2) 法令を遵守する。
- (3) 紫紺のユニホームを着る。
- (4) 川の氾濫を防ぐ工事を終える。
- (5) 会議でロンセンが繰り広げられる。
- (6) トウハの垣根を越えて協力する。
- (7) 校内のテンラン会に絵を出品する。
- (8) キヌ織物の産地を訪ねる。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

ケガをして陸上部を休部している高校生の「わたし」（定本風香）は、夏休みに図書室で明戸類という女子生徒と出会う。明戸はいつも司書室でパソコンを使って作業をしている。明戸は「わたし」が読みたいと言った本を貸してくれる約束をしていた。

司書室に戻ると、明戸さんは窓際に移動していた。パソコンの画面がわたしに見えない位置で、カタカタとタイピングしている。絶え間ない音は、楽器を奏でているみたいだ。

「スマホ、使わないの？」

「*フリック入力だるいし遅い。」

「すごいね。キーボードのほうが速いんだ。」

「慣れてるから。」

「何をしてるの？ プログラミング？ 動画作製？」

タイピングの音が止んだ。明戸さんは、通学鞆から文庫本を取り出した。

「これ、はい。」

表紙には、ぼやとしたイラストが描かれている。男の人が走っている絵だ。題名は、『走れメロス』。

「ありがとう。」受け取って、パラパラとめくる。「結構分厚いね。」

「それ短編集。『走れメロス』以外にも収録されてるから、読むとき気を付けて。」

「いつ返せばいい？」

「読めたらいいよ。二学期に入ってからでも、全然。」

「わかった。早く読めるよう、頑張るね。」

汚れないようハンカチでくるんで、通学鞆に仕舞った。

「読書は頑張っていることじゃないけどね。」明戸さんの顎が、くんと上がる。癖毛の前髪は、目にかかるくらい長い。「普段、本当に本を読まないの？ 一冊も？」

「一冊も。だから読書スピードもすごく遅くて。」

「オーディオブックとかは？ 朗読してくれるやつ。」

首を横に振る。朗読されたら、さらに眠気が強まりそうだ。

「どうして眠くなるの？」

訊かれてから、考える。「文字がたくさんあるから、かな。」

「なんで文字がたくさんあると眠くなるの？」

「なんでだろう。でも、小説だけじゃないんだ。映画も、ドラマも、ア

ニメも、漫画も、ほとんど最後まで憶えてない。」

「飽き性ってこと？ 集中力が保てないとか？」

「どうなんだろうね？」

わたしは通学鞆を肩にかける。じゃあ、と言いかけて、「あのさ。」と呼び止められた。

「定本さん、部活は、休部中？」

「うん。」右脚をちよつとだけ上げる。「サポートも、やってない。」

「えっと、じゃあ、これから空いてる、ってことでいい？」

頷くと、明戸さんの視線が泳ぐ。

⁽¹⁾「あー、あの……その、うちの家、ブックカフェを、やってるんだけど、来る？」

ブックカフェ。「いいの？」

「いい、けど、そんな、即答？」

「悩んだほうがよかった？」

「そういうわけじゃないけど……えっと、歩くから、脚は大丈夫？」

「走らなければ。」

そう、へえ、と言って、明戸さんはノートパソコンを閉じた。ケースに入れて、通学鞆に仕舞う。テーブルの上の鍵を手にとって、冷房を切った。わたしがカーテンを閉めると、司書室は夜みたい暗くなった。

職員室に鍵を返して、校舎を出る。真夏の陽射しに、明戸さんは折り畳みの日傘を差した。日傘を忘れたわたしは、目元に手をかざして影を作る。腕がじりじり焼けていく。湿度と気温が下がる気配はない。朝に塗った日焼け止め、落ちてしまったかも。塗り直したくても、予備は部活用バッグのなかだ。

「こっち。」と言われて、^x普段は使わない道を、明戸さんについていく。

駅と反対方向だ。知らないお店がたくさんある。信号に引っ掛かるたび、明戸さんはスマホを取り出している。^{*}逃げ水に見えるアスファルトを黙々と進むこと、三十分。坂道を上った住宅街の一角にたどり着いた。

そこには三階建ての小さな家があった。家の一階部分は半地下になっていて、木製のドアにはプレートがかかっている。『ブックカフェ・アトガキ』。開店時間は十三時半から十九時まで。定休日は火曜。

「アトガキって、本の？」

「そう。店主が、定年退職して始めたお店。そろそろ人生のあとがきでも書くか、って。」

「おしゃれな理由だね。」

来た道を振り返ると、坂の下に街が広がっていた。繁華街と駅を越えた先には、右から左へ流れる大きな川と、アスファルトの敷かれた堤防も見える。

半地下の入り口へと階段を下りて、明戸さんがドアを開けると、カンカンとベルの音が鳴った。わたしの背後でドアが閉まるときも、同じ音が鳴る。冷房の涼しさに全身が包まれて、ほうと息を吐いた。

「いらつしやいませ。」と、エプロンを着けた男の人が、カウンターの内側で言った。黒色の短髪で、細身の体格だ。持っていた文庫本を閉じて、座ったまま「おかえり。」と言い直す。たぶん、店員さん。他にお客さんらしき人はいない。

明戸さんが言う。「^{おりあい}織合さん、また店番？」

男の店員さんが答える。「これは間借りの対価^{*}。」

「あつそ。定本さん、この人は織合慎さん。ここに入り浸ってる社会人。二十代後半。で、こっちは定本風香さん。陸上の人。」それぞれを紹介した明戸さんが、通学鞆をカウンター席に置く。「定本さん、そこ、座っ

て。」

わたしは通学鞆を足元に置き、明戸さんの鞆を挟んで隣に座った。

明るくて狭いお店だった。テーブル席が三つと、カウンター席が五つ。カウンターと反対の壁が一面本棚になっていて、サイズの異なる本がずらりと並んでいる。調度品の色合いは古そうで、大人っぽい純喫茶といまっぽい喫茶店の中間の雰囲気だ。

「何か飲みます？」と織合さん。身長はわたしと同じくらいだろう。メニュー表を手放すように置く仕草に、性格を感じる。

「じゃあ、カフェラテで。」こういう場所では、カフェラテが似合っている気がした。

「この暑いのに、よく熱いの飲むね。」明戸さんがノートパソコンを取り出しながら言った。

「あたしアイスティー。」

織合さんが片手を振る。「自分で淹^いれる。出来合いをグラスに注ぐだけだろ。」

「ちっ。みえこさんに言いつけてやる。」明戸さんが席を立ち、カウンター内に入った。

カウンターの奥に続く小部屋は、キッチンらしい。カーテンの隙間から小ぶりの冷蔵庫が覗^{のぞ}いている。そこからピッチャー^{*}を取り出した明戸さんは、背の高いグラスに四角い氷を入れてから、紅茶を注いだ。

織合さんは、カチャリ、ザラザラ、とカウンターの端でコーヒー豆を準備している。やがてゴリゴリとミル^{*}にかける音がした。

わたしは体をねじって、背後の本棚を眺める。本当に壁一面、本棚だ。上から下、端から端まで、本が詰まっている。

「全部、小説？」

「ほとんど。」と、キッチンから戻ってきた明戸さんが答える。「右端はエッセイと旅行記。大きいのは風景の写真集。」

我が家では見られない光景だ。「すごいね。」

「初のブックカフェ？」

「うん。」

学校帰りにカフェに寄ること自体、初めてだ。空腹に耐えられなくて、コンビニで肉まんを買い食したことはある。

明戸さんのノートパソコンが開かれ、パチパチとタイピングが始まった。

「おまえなあ。」と、カウンターの端で織合さんが溜息^{ためいき}を吐く。「友だちがいるのに。」

「うるさいな。キリがいいところまでやらないと気が済まない性分だって何回言えはわかるの？」

「にしても初めてじゃないか、ルイが人を連れてくるの。」

「ルイ？」

「あたしの名前。種類の^ゝ類。」

明戸類。

わたしは織合さんに尋ねる。「店番っていうのは、従業員の方ですか？」

「俺、ここの地下室で本の修繕をやってるんです。場所を借りてるお礼にボランティアで店番をしたのが、最近アルバイトに昇格しまして。」

「営業日の半分は入ってるからね。」明戸さんがパソコンの画面を見ながら補足する。「あまりに無償労働が過ぎるから、賃金を押し付けることにしたんだよ、オーナーが。」

「ここのオーナー、修繕の専門家だからいろいろ教えてもらってるんですよ。そいつの大伯母^{おおおば}。」織合さんは、くいと顎で明戸さんを示した。

「そ、おばあちゃんの姉。最近、市の貴重な郷土資料が見つかったとかで、非常勤で働きに出てんの。とつくの昔に定年したつてのに。」

たしかここは、明戸さんの家だったはずだ。ご両親と大伯母さんと住んでいるのだろうか。珍しい組み合わせ。でも外観を見た感じ、そこまですで広い建物には見えなかった。もしかして、二人暮らし？

こと、と音がして前を向くと、コーヒーマカップが置かれていた。

「カフェラテです。」と織合さん。「お口に合えばいいけど。」

「いただきます。」早速、一口飲んだ。「美味しいです。」

「よかった。学生のとき、カフェのバイトが長かったんですよ。」

明戸さんが顔を上げた。「織合さん、一瞬だけでいいから、裏に行ってくれない？ 三分。何か仕込んで。」

「何を仕込むんだよ。」

「スコーンとか。」

「どう仕込むんだ。」

織合さんがカウンター奥に引っ込んでいく。キッチンの音が漏れ聞こえるから、たぶんわたしたちの話し声も聞こえているけれど、いいのかな。

「あの。」と意を決した口調で、明戸さんはわたしにノートパソコンの画面を向けた。縦書きの文字がずらりと並んでいる。「見てもらったらわかると思うんだけど、これ、小説。」

「小説？」パソコンの画面に？

明戸さんはそっぽを向きながら、続ける。「その、あたし、創作活動してて。」

「あつ、なるほど。すごいね。」

「ネットにアップしたりとか、新人賞の公募に送りつけたりとか、そこ

そこ、精力的にやってて、ほとんど呼吸みたいなもので。」

「呼吸。」よくわからないけど、書いた小説で何かをしていることはわかった。「うん。」

「それで、お願いがあつて。いま、次回作のネタに悩んでて、だから、『走れメロス』を貸す代わりに、あなたをモデルに、小説を書いていい？」

黙っていると、明戸さんの鋭い眼光がわたしを刺した。「無理なら無理って、はっきり言つて。」

「ごめん、ちょっと考え事してた。」わたしは答える。「いいよ。でも、わたしをモデルにしても、つまらない作品になると思うから、」

「そんなわけない。」

⁽³⁾ 遮って断言した明戸さんは、今度は真剣な顔つきで、まっすぐわたしを見ていた。

「絶対にハッピーエンドにしてやる。」

むしろモデルにするんだから、と言いかせるように力の籠った言葉が続く。

「ハッピーエンドにする、責任があるでしょ。」

明戸さんの口調と眼差しは、司書室の窓から差し込んでいた陽射しみたいに強かった。

(鯨井あめ「白紙を歩く」による)

〔注〕 フリック入力——スマートフォン（スマホ）において、指をス

ライドさせて文字を入力する方法。

逃げ水——蜃気楼の一種。

対価——財物や行為などによって人に与えた利益に対して受け

取る報酬。

ピッチャー——飲み物を入れる容器。

ミル——コーヒ―豆を細かく砕く機械。

〔問1〕⁽¹⁾「あー、あの……その、うちの家、ブックカフェを、やってる

んだけど、来る？」とあるが、このときの「明戸さん」の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 自分とは違い、普段読書をしないという「わたし」に興味をもっており、勇気を出して自宅のブックカフェに誘おうと緊張している様子。

イ 自分の家に招くつもりはなかったが、休部中で時間を持て余していると聞いたため、「わたし」を誘わざるを得なくなり動揺している様子。

ウ 自分とまったく異なるタイプで理解できないだけでなく、自己理解までも不足しているような「わたし」に、あっけにとられている様子。

エ すぐに帰宅したかったが、なかなか「わたし」が帰ろうとしないので、自分の家まで連れていくのも仕方がないと半ばあきらめている様子。

〔問2〕⁽²⁾「おまえなあ。」と、カウンターの端で織合さんたのいきが溜息を吐く。

とあるが、このときの「織合さん」の心情として最も近いものは、次のうちではどれか。

ア 客とはいえない二人の相手を仕事中にさせられている上に、明戸が店内で好き勝手に振る舞うのでいらいらしている。

イ 誰といってもマイペースに行動してしまいう明戸を注意してきたものの、変化が見られないため冷たく突き放そうとしている。

ウ 友人の前でも年長者に対して生意気な態度をとる明戸に腹立たしさを感じているが、なんとか怒りを我慢しようとしている。

エ せっかく自分で友人を連れてきたのにもかかわらず、ろくに相手もせずに身勝手にしている明戸にあきれている。

〔問3〕⁽³⁾ 遮って断言した明戸さんは、今度は真剣な顔つきで、まっすぐ

わたしを見ていた。とあるが、このときの「明戸さん」の気持ちとして最も近いものは、次のうちではどれか。

ア 自分をモデルにしてもいい作品にはならないと言う「わたし」に、モデルになることへの自信をもたせようと必死に説得する気持ち。

イ 小説の創作にあたり、「わたし」をモデルにする以上、主人公が必ず幸せになるような作品を書かなければならないと決意する気持ち。

ウ 熱意をもってこれから小説の創作をしようとしているのに、モデルになることに対して消極的な「わたし」にいらだっている気持ち。

エ これまで努力して小説を書き続けてきた自負があるので、表現力が不足していることを「わたし」に指摘されて、強く反発する気持ち。

〔問4〕 次の会話は、文章を読んだあとの国語の授業の様子である。会話文中の「①」「②」に当てはまる最も適切なものは、あとのそれぞれの選択肢のうちではどれか。

先生 …小説においては、小道具や空間が象徴的に用いられることがよくあります。この作品ではどうでしょうか？

生徒A …明戸が使っている「ノートパソコン」がたくさん出てくるよね。何か読み取れないかな……。

生徒B …最後の場面で、初めて「明戸さんはわたしにノートパソコンの画面を向けた」(点線部Y) よね。

生徒C …そうか。司書室の場面では、ノートパソコンを使って何をしているのかという定本の質問に明戸は答えていないものね。つまり「ノートパソコンの画面を」見せるという行為は「①」を象徴していると読めそうだね。

先生 …おもしろい気付きですね。一方の定本はどうでしょうか？

生徒A …定本が明戸に連れられて、明戸の家に向かっていくところで、「普段は使わない道を、明戸さんについていく。駅と反対方向だ。知らないお店がたくさんある。」(点線部X) という物理的に未知な空間に入り込んでいく表現があるけれど、この表現はそれだけではなく「②」も象徴的に表していると読めるんじゃないかな。

生徒B …なるほど。定本は物理的にも精神的にもだんだんと明戸に近づいていくんだね。そう読めば明戸が、学校の司書室では答えなかったことを、自宅では定本に話せたのも、二人が近づいた結果だと納得できるね！

先生 …小説に出てくる小道具や空間に注目すると、深い理解につながりますね。

「①」の選択肢

A 明戸が自分の行動を反省したこと

I 明戸が定本より優位に立ったこと

U 明戸が弱さをさらけ出したこと

E 明戸が定本に心を開いたこと

「②」の選択肢

A 明戸に導かれるままに寄り道することを後ろめたく思いながら、自分の家から離れていく定本の様子

I 明戸とともに歩き、真夏の暑さのせいで、どこにいてもかわからず意識が遠のいていく定本の様子

U 明戸と出会い、あまり親しんでこなかった読書や本という新しい世界に導かれていく定本の様子

E 明戸と話す中で、小説の魅力に気付き、得意げにブックカフェへの道を進んでいく定本の様子

〔問5〕 本文の内容や表現を説明したものとして**あてはまらない**ものは、次のうちではどれか。

ア 「カタカタとタイピングしている。」「カランカランとベルの音が鳴った。」「カチャリ、ザラザラ、」などの擬音語を用いることによって、文章にリズムと臨場感を与え、読者がその場面を想像しやすいものになっている。

イ 「絶え間ない音は、楽器を奏^{かな}でているみたいだ。」「カーテンを閉めると、司書室は夜みたいになくなった。」「陽射しみたいになかった。」「といった比喩表現を用いることで、その場面や登場人物の様子を印象的に表現している。

ウ 「ブックカフェ。」「いいの?」のような地の文と会話の文を改行せずに連続させている表現が複数の箇所で見られるが、地の文では心中で思ったことを表し、会話の文では実際の発言を表すという形での統一がなされている。

エ 「たしかここは、明戸さんの家だったはずだ。」「たぶんわたしたちの話し声も聞こえているけれど、いいのかな。」など「わたし」の心の内も語ること、読者が「わたし」に寄り添いながら文章を読み進められるようにしている。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「知恵」は十全なアウトプットを意識していますが、「知識」は必ずしもそうではありません。そして、「知識」はインプットの局面で手渡さ

れたり受け取ったりすることができると思われています。しかし、「知恵」は受け渡しができるようなものではないと思われているようです。ですから、よく見かける「獲得した知識を知恵にしなければならぬ」といった表現がなされたりもするのだと思います。

ただ、「知恵」が大事だという人たちも、「知恵」の材料として「知識」が必要であることは共通して認めているように思います。ただ、教えられたり獲得した「知識」だけでは、あまりものの役に立つとは考えられないようなようです。ですから、「獲得した知識を知恵にしなければならぬ」と言われることになるわけです。

⁽¹⁾「知識」と「知恵」との区別といったことに、どうしてこだわるのかと思われるでしょう。

斬新な考えや知的な発想や柔軟な思考結果を見せられると、人はそれをその人の柔軟で斬新な思考ができる頭脳の働きに帰すことがほとんどです。もちろん思考をするのに「知識」は必要と考えられています。したがって、このような考えを少々戯画的に図式化すれば次のようにならないでしょうか。

無味乾燥な「知識」 + 柔軟な思考 ↓ 「知恵」または妥当な解決策

すなわち、「知識」は無味乾燥なものでも構わない、それに柔軟な思考を働かせて「知恵」となし、意味のあるアイデアをアウトプットするのだという図式です。

⁽²⁾しかし、ここまで極端に図式化すると、さすがになんだか奇妙な感じがしてこないでしょうか。

柔軟な思考が大事なことは言うまでもありません。柔軟な思考ができるにこしたことはないのですが、材料に使われる「知識」は、意味

のあるアイディアのアウトプットにまったく関係ないのだろうかという違和感です。

「知識」は材料に使われるのですから、使いやすい「知識」とそうでない「知識」があるのではないか、役に立つ「知識」とあまり役に立たない「知識」があるのではないだろうかと思ってしまうのではないだろうか。

「知識」と「知恵」との区別と言ったことに、どうしてこだわるのかと思われたかもしれません。「知識」と「知恵」とをやたらと区別し、「知恵」を称揚して「知識」を等閑視するのが世の常識になっているようなのですが、どうもそれは疑ってかかった方がいいかもしれないということです。

クイズ番組などで「ひらめき」などに焦点を当てたものがありますが、これらの背後には柔軟な思考に対するあこがれと信奉があるように思えてなりません。そこで用いられている材料が、あまり通常の思考には関係のないものだったりすると、その思いを強くします。

思考それも柔軟な思考にあまりに力点が置かれていることに危惧の念を抱いているにすぎません。すなわち、柔軟な思考ばかりに注目して、思考の材料や思考の指針にもなる「知識」の働きを無視しないしは軽視しているのではないかと危惧しているのです。そして、「知識」に質の差があるということに気づいていないのではないかと危惧しているのです。

こう言い換えてもいいかもしれません。「知識」は「知恵」や妥当な解決の単なる材料であって、アウトプットの質にさして関係しないと思われています。しかしそうではない、大いに関係するというのがここで述べたいことです。

(3) 簡単な例として「割り算」を取り上げてみましょう。

「割り算とはどういう演算ですか？」と問うと、ほとんどの人が「分けることだ」と答えます。確かに、「15個の飴を5人で等しく分けました。ひとりいくつになるでしょう」といった課題であれば、 $15 \div 5$ という割り算をして、ひとり3個になるという結果を得て「分ける演算だ」ということで問題はありません。

しかし、 $2 \div 3$ という分数や 0.5 といった小数で割るというのはどういう意味なのでしょう。確かに $5 \div 2 \div 3$ は、割る数をひっくり返して掛けることによって答えが得られるというのは、小学校で習うことです。ですから、まず全員できるでしょう。問題は、 $2 \div 3$ で割るという意味です。この時、先ほど出てきた「割り算とは分けることだ」という考えが使えないのは明白です。「 $2 \div 3$ 人で等しく分ける」というのは意味をなしません。

あるクルマが、40 Lのガソリンで500 km走ったとします。この時 $500 \text{ km} \div 40 \text{ L}$ で得られる 12.5 km/L という数値は、1 Lあたりの走行距離を表しています。いわゆる「燃費」です。逆に $40 \text{ L} \div 500 \text{ km}$ で得られる数値 0.08 L/km という数値は、1 km走るのに要したガソリンの量を示しています。どちらでどちらを割るのかは、用途によって異なってきますが、得られた二つの数値は、「割るのに用いた量（距離かガソリンかですが）」の「1あたり」を表しています。これはガソリンが1より小さい量であっても変わりません。「 $6 \cdot 25 \text{ km}$ 行くのに 0.5 L のガソリンが必要でした」という場合に、 $6 \cdot 25 \text{ km} \div 0.5 \text{ L}$ で得られる 12.5 km/L が、1 Lあたりの走行距離、燃費を表しているのは明白です。

割り算が「1あたりの値を求める」演算だと考えるなら、先の分数÷

分数のような問題でも意味がわかります。長さ $2/3$ mのパイプの重さが $5/2$ kgだったとしましょう。この時1 mあたりの重さを求めるには $5/2 \text{ kg} \div 2/3 \text{ m}$ となり、 $15/4$ (kg/m) という値が得られます。1 mの重さは $15/4$ kgになるわけです。

「割り算」という同じ演算についての知識ですが、「1あたり」という捉え方が、「分ける」という捉え方より、より広範にものごとを捉えられるのですから、知識として質が良いと言えるでしょう。「1あたり」という捉え方は、「分ける」という捉え方を包含しますし、より広い範囲の割り算を理解でき、より広い範囲で割り算を使えることになるのです。

「1あたり」の「知識」の方が、「分ける」に比較して柔軟に使えるでしょう。同じ割り算に関する二つの「知識」に「差」があるのです。柔軟な思考だけが、アウトプットの柔軟さ・適切さに関わるのではなく、「知識」の違いによっても差を生じるのです。「知識」は思考の質に関係しないわけではないのです。

唐突ですが、こんな知識をお持ちでしょうか。⁽⁴⁾ 私たちの体についてですが、胃の内部や腸の内部は体の外側だということです。口から消化器を通じて肛門まで、ずっと管が通じているのはわかります。ですから、極端に単純化すれば、人間の体は真ん中に穴が空いた円柱に手足がついたようなものです。人間の消化器はドーナツにある穴のようなものです。ドーナツの穴がドーナツの内部とは言えないように、食物が通っていく私たちの消化器は穴なのです。

消化器が外側であるという知識を持っていれば、食物を口に入れると、それでもう体内に取り込んだのだとは思えなくなるでしょう。歯で咀嚼^{そしぐ}

し、胃でこなし、生物で習った憶え^{おぼ}きれないほどの種類の消化液を出して、食物を何とか腸壁から内部に取り込めるかたちにしようとしているのだと考えることができるようになるでしょう。

薬だって同様です。薬を飲めばもう体内に取り込んでいると思ひ込みがちですが、消化器内は体外なのですから、胃なり腸なりから吸収されなくてはなりません。だいたいにおいて薬の吸収は半分程度だと考えられているようです。

毒だってそうです。飲んだだけで吸収されなければ害は及ぼさなはずです。吸収されてわれわれの正常な働きを阻害するので毒性を現わけます。われわれの体と運用のメカニズムを阻害するので毒になるわけで、毒性があるから毒というわけではないでしょう。人には有毒でも別のある動物には無害なこともあり得るわけです。

消化器官が体の外側だと知っていれば、食物や薬や毒が吸収されていくメカニズムがどうなっているのかに興味を引かれるかもしれません。サプリメントの広告で、患部で重要な機能を果たしているとされる成分が、いかに多く含まれているかをうたっているのをよく見かけます。その成分が患部の不調に関わっているのは認められるとしても、腸からどのように吸収され、どのようなメカニズムで患部にまで運ばれるのか、まず気になってしまいます。

消化器が外側であるという知識を持っていれば、特別柔軟な頭脳を持つていなくても、以上のようなことは考えられるのではないかと思います。少なくともその知識を持っていない時に較^{くら}べて何らかの違いはあるのではないでしょう。

またまた、話は飛びますが、「解が求まるには未知数だけの方程式が必要」などという知識もありましたね。⁽⁵⁾ これなどは、問題を解くため

に方程式を立てている時、現在の自分の状態を自覚する（これを認知心理学ではメタ認知とかモニタリングとよびます）のにすこぶる便利です。メタ認知的またはモニタリ的な知識を持っているのといないのでは、われわれの知的活動が円滑になるかどうかの点で大きな差になる可能性があります。

（西林克彦「知ってるつもり」（一部改変）による）

〔注〕 十全——十分に整っていて完全なさま。

戯画——たわむれに描いた絵。

称揚——ほめたたえること。

等閑視——物事をいいかげんに扱いなおざりにすること。

信奉——しんぽう 最上のものと信じて尊ぶこと。

$2/3$ ——3分の2のこと。以下も同様。

0.5 ——0.5のこと。以下も同様。

$5/2 \div 2/3$ ——

$\frac{5}{2}$	$\div$	$\frac{2}{3}$
---------------	--------	---------------

のこと。以下も同様。

〔問1〕⁽¹⁾ 「知識」と「知恵」との区別に関する一般的な考え方を、筆者

はどのように捉えているか。その説明として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 「知識」はインプットの局面で他者から受け取るものであるのに対して、「知恵」は自分が持つ「知識」自体をアウトプットする局面に必要な働きである。

イ 「知識」は受け渡しが可能で獲得しただけでは役に立たないものであるのに対して、「知恵」は「知識」を材料として意味のある解決策を生む力である。

ウ 「知識」は柔軟で斬新な思考を行うのに必要なものであるのに対して、「知恵」は「知識」を用いて知的な発想や柔軟な思考を行う頭脳の働きである。

エ 「知識」は獲得したら「知恵」にしなければならない材料であるのに対して、「知恵」は材料としての「知識」がないとあまり役に立たない力である。

〔問2〕⁽²⁾ しかし、ここまで極端に図式化すると、さすがになんだか奇妙な感じがしてこないでしょうか。と筆者が述べるのはなぜか。その説明として適切なものを次のうちから選べ。

ア 「知識」は無味乾燥なものと表現しているにもかかわらず、妥当な解決策を生み出すために「知識」が「知恵」よりも大切であるかのよう

に思わせるから。

イ 「知識」を無味乾燥なものと表現することで、「知恵」の材料として大切であるはずの「知識」が、柔軟な思考より重要度が低いもののように感じさせるから。

ウ 「知識」には思考に役立つか、使いやすいかという点で差があるはずであるが、無味乾燥なものと表現したために「知識」にはどれにも差がないように感じさせるから。

エ 「知識」には意味のあるアイデアのアウトプットとの関係があると考えられるのに、「知識」を無味乾燥なものと表現することによって関係がないかのように思わせるから。

〔問3〕⁽³⁾ 簡単な例として「割り算」を取り上げてみましょう。とあるが、

「割り算」の例に関する説明として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 「割り算」が「1あたり」の値を求めるための演算であることを示すことで、柔軟な思考のためにはなるべく幅広く知識を身につけることが重要であるという主張をわかりやすくしている。

イ 二つの量のどちらの量でどちらの量を割るかによって得られた数値の単位が変わることを示すことで、思考方法の違いによってアウトプットの質に差が出るという主張を明確にしている。

ウ 分数を分数で割る式を話題にして「割ること」の意味の理解しにくさを示すことで、「知識」をインプットするには柔軟な思考によって真の意味をとらえるべきだという主張を補強している。

エ 「割り算」が「分ける」ためだけでなく「1あたり」の値を求めるための演算でもあることを示すことで、知識の質が思考の質に影響するという主張に説得力をもたせている。

〔問4〕⁽⁴⁾ 私たちの体についてですが、胃の内部や腸の内部は体の外側だ

というものです。とあるが、「胃の内部や腸の内部は体の外側だ」という捉え方がどのような効果をもたらすのか。その説明として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 食物などを口に入れるということは外部から体の内部に必要なものを取り込む行為であると考えられるようになる。

イ 消化器官が外部のものを体内に吸収する部位であることに気づき、吸収のメカニズムに関心を向けるようになる。

ウ 飲んだ薬や毒のもつ効果や害の大小は吸収のメカニズムが阻害される度合いに左右されるのだと判断するようになる。

エ 円柱の穴が人間の体を貫くというイメージによって、必要な成分を不調の患部に運ぶ消化器の機能を理解しやすくなる。

〔問5〕⁽⁵⁾ これなどは、問題を解くために方程式を立てている時、現在の

自分の状態を自覚する（これを認知心理学ではメタ認知とかモニタリングとよびます）のにすこぶる便利です。とあるが、この文脈における「現在の自分の状態を自覚する」ことと近い具体例は次のうちではどれか。

ア 修学旅行先の路上で外国の人が困っているように見えたため、この国の人は不明であったが思いきって英語で話しかけてみた。

イ 清掃の時間に担当する区域がわからなかったので、清掃場所を間違えて注意を受けないように同じ班の人に付いて行くことにした。

ウ 部活動に真剣に取り組まないチームメートが増えてきたので、今の部活動に足りないことをノートに書き出して活動内容を再考した。

エ 体育祭の記録係としてよりよい動画の撮影方法を考えていたら、担当教員に台の上からだと全体が見えやすいと助言されて実行した。

〔問6〕 すなわち、柔軟な思考ばかりに注目して、思考の材料や思考

の指針にもなる「知識」の働きを無視しないしは軽視しているのではないかと危惧しているのです。そして、「知識」に質の差があるということに気づいていないのではないかと危惧しているのです。とあるが、「『知識』に質の差がある」という筆者の考えについてあなたが考えたことを、体験や見聞を挙げながら二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。「などもそれぞれ一字と数えよ。

4

次の『徒然草』第一一段についての文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

初冬十月ころ、栗栖野くるすのという所を通つて、ある山里に人を尋ねて入つていったことがありました。が、どこまでも続く苔こけ⁽¹⁾の生えた細道を踏み分けて行くと、物寂しげに住んでいる庵いおりがあった。木の葉に埋もれる懸樋かけひから滴る雪しずくのほかに、音を立てるものもまるでなかった。仏供みぶくを置く棚に菊や紅葉などを折つて適当に置いてあるのは、それでも住む人がいるからなのであろう。こんな状態でも人は生きていけるものだと感慨深く見ているうちに、向こうの庭に、大きな蜜柑みかんの木で、枝もたわむほどに実をつけているものがあり、その木の周りを嚴重に囲つていたのには、少し興きが醒め、この木が無かつたらと思えたことである。

（神無月かみなづきのころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ると侍りしに、遙かなる苔の細道をふみ分けて、心ほそく住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるる懸樋のしづくならでは、つゆおとなふものなし。閑伽棚あかだなに菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられるよとあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子かうじの木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。）

いかにも遁世者とんせいしゃの生活を描いていて、たしかにこういう日常があっただろう、と思わせる段です。オチも明瞭です。

ただ、このような段から何を読み取ればよいかは、必ずしも明確では

ありません。これは、同時代の読者には自明のことでも、いまとなってはつかめない事柄が多いからです。

そこで、この段に現れる唯一の固有名詞、「栗栖野」を手がかりにします。

栗栖野は京都近郊の地名です。しかし複数あり、有名なものでも、現在の北区西賀茂・鷹峰の辺り（旧愛宕郡）、および東山区山科附近（旧宇治郡）にそれぞれあります。山科には、兼好が一部の権利を所有していた小野荘という荘園があり、栗栖野はその手前なので、従来の注釈書では、この栗栖野は山科のそれであり、兼好は居住していた小野荘に出向くとき通過したのだ、と説明していたのです。

しかし、この山科小野荘と兼好との係わりは、かつて力説されたほど深くはありません（たぶん投機目的で、複数所有していた不動産の一つに過ぎず、兼好自身は現地支配に携わらず、住民からの地代を収益としていました。住んだことはありません）。よほどそれに都合がよい史料があれば別ですが、伝記的事実と無理に結びつける必要はないようです。

そもそも、この一段、いかにも実際に見聞したような筆致ですが、経験をそのまま伝えようとしたものではありません。「迫真のルポ」などという謳い文句に狎れた私たちは、書かれた文章は、ともかく事実であることを重視し、実際に経験したからこそ価値がある、と考えがちです。しかしそれは現代のように情報を垂れ流している社会のことで、近代の社会では、個人の経験にそんな価値はありません。なぜなら、他人のことなんか、よほど親しい人でない限り、何も知りませんから。まして文学作品は、いちおう不特定の読者数を想定しているとすれば、考えたこと経験したことを、文飾なしに記すことはまずありません。⁽²⁾当時の文章は、発信する人間も機会も極めて少なかったことを思えば当然

ですが、必ず作者の思考のフィルターを通した再構成、つまりなんらかの美化や脚色が働いているものです。そのためにたとえば自分の主張と同じようなことを述べている古典などによりどこを求め、その一節を引用したりします。また使われる語彙も、無造作な使用はありえず、選択や組み合わせに工夫や配慮があったはずです。こうしたレトリック（文飾）を駆使するのは、自分の主張が決して個人のものではなくて、もっと公共的な価値観を共有するものなのだ、と読んで納得してもらいためであったからです。

言葉は社会的、あるいは文化的な使われ方をするものですから、当然、文字通りの意義のほかにも、さまざまな含意があり、喚起されるイメージがあり、言ってみれば物語をしのばせています。当時の読者には、こうした含意や物語の方こそ親しいもので、とくに文章を記すときにはこれを利用することが腕の見せどころでした。

これが最も高度に働くのが和歌です。三十一字に圧縮された世界で、言いたいことを伝えなくてはいいけませんから、和歌で用いられる言葉（歌語）の働きは最も効果的になるよう慎重に選択されているはずです。わけでも地名は最も効果的に使われなければなりません。それがいわゆる歌枕です。

歌枕とは、古くから和歌に詠まれて来た地名のことですが、必ず決められたパターンに沿います。たとえば、吉野山は大和国（奈良県）の歌枕ですが、雪が深い奥山と詠まれ、さらに桜の咲く場所としてとらえられました。しかも吉野は古代から政治的敗者が身を隠す土地でもあったので、さまざまな物語を帯びています。作者が吉野山という歌枕を使えば、読者はおのずとその背景を察知しなければなりません。同じように更級里^{さざしきのさと}といえ、信濃国（長野県）の歌枕ですが、古くから美しい月

が詠まれ、そこに棄老伝説（隣接する姨捨山の、オバステ、というネーミングからの連想）が結びつきました。つまり、繰り返し詠まれて共有され、定着した意味合いこそ大事で、現地の風土や地形はほとんど関係ありません。とくに中世の和歌では、たとえ歌枕を詠んでも、現地に旅した経験を伝えるものではない、といってよいでしょう。

(3) この一段の、切りつめられた無駄のない文章のうちでは、「栗栖野」もまた、歌枕のごとき働きをしていると考えるべきです。そうすると、古来、和歌で詠まれたり、物語に登場するのは、愛宕郡の栗栖野の方でして、しばしば「栗栖の小野」という形で好まれていました。現在は市街地からもさして遠いところではありませんが、しかし、この「栗栖の小野」は、古くは禁野、つまり皇室所有の狩場でした。さらに中世にはそれは過去の記憶となり、この歌枕を詠む和歌では、狩猟に好適季節ということとで晩秋から初冬の、枯れた薄や萩が取り合わせられ、さらに時雨・霜・雪も加わり、荒涼たる風景がひろがる山野のイメージが定着していきました。

たとえば、兼好の友人で和歌四天王の一人であつた頓阿という歌人は、けふははや鳥立も見えず暮れにけりまたや栗栖の小野の御狩場

（今日は早くも鳥立も見えなくなるほど日が暮れてしまった。明日また来ることにしようか、この栗栖野の狩場に）

と詠んでいます。歌会で「夕鷹狩」という題で詠んだもので、もちろん現地に行つたわけではありません。鳥立とは狩場に鳥が集まるよう作つた枯れ草や水辺のことです。「くるす」に「来る」を掛詞にしたの

は言語遊戯的ですが、とつぷり暮れてひとり残された、晩秋の広々した荒野の風景は、過去に培われて来た歌枕「栗栖野」のイメージを前提にしています。

作者も読者もこのことを踏まえていなければいけません。その上で、一段の真の舞台は、寂しく広大な栗栖野からさらに奥に入った山あいです。そんなところにもし庵があれば、隔絶された秘境となり、住んでいるのはよほど世間を避ける人物でしょう。兼好は目をやり、その好ましい住居を描きます。しかし、「栗栖野」がイメージだとすれば、この描写もたぶん実景ではなく、観念的な草庵での生活であると言えそうです。

そして遂に「かくてもあられけるよ」という感慨に浸ります。兼好自身はとてもここでは生きていけない、という歎息なのでしょう。遁世はしてみたものの、俗世間から完全に離脱した生活を営み得ない自身への歎きです。

こうやってまだ姿を見ない住人への共感、思慕が頂点に達したところで、ふと視線を庭にずらすと、大きなミカンの木があり、枝もたわわに実がなつていて、盗難を警戒してでしょう、厳重に柵で取り囲んでいたのが目に入ります。住人の俗物性が露わになつてしまい、「少しことさめて」、あつという間に幻滅した、というわけです。

(4) さてそれでは、この段は、いったい何が言いたかつたのでしょうか。たとえば現代、田舎暮らしを求めて地方に行つた都会の人間が、山中で一軒家を見て、その不便さに感動していると、軒下に監視カメラがあつたから興ざめた、くらいに受け取られるかも知れませんが、それでは少し浅薄に過ぎ、真意はもう一段深いところにあるでしょう。つまりは

兼好が理想とした遁世——人間も生活も——は現世では得られないのだ、という思いなのだと思います。

（小川剛生「徒然草をよみなおす」（一部改変）による）

〔注〕

仏供——仏に供えるもの。

遁世者——世を避けて仏門に入る人のこと。

兼好——『徒然草』の作者。

地代——土地を借りるときの料金。

筆致——文字や文章などを書くときの筆の調子。

狎れた——親しくなりすぎてけじめがない態度になった。

含意——ことばの表面には見えないが、わかる人にはわかるような意味。

うな意味。

萩——水辺にむらがつてはえる雑草。

和歌四天王——頓阿、慶運、浄弁、兼好の四名。

歌会——人々が集まって和歌を詠み、披露しあう会。

隔絶——遠く離れていて、他とのつながりがないこと。

草庵——わらやかやで屋根をふいたような質素で小さい家。

思慕——慕ってなつかしく思うこと。

俗物性——金銭や名誉、地位などにとらわれて、そのことばかり気にするような性質。

り気にするような性質。

浅薄——考えかたがうすつぺらなこと。

〔問1〕⁽¹⁾ のとあるが、これと同じ意味・用法の「の」を含む例文を、次のうちから選べ。

ア この足跡はうちの猫のだ。

イ 私の読んだ本はミステリーです。

ウ 我が国初のロケットが発射された。

エ 新品を買うの|買わないの|と思案した。

〔問2〕⁽²⁾ 当時の文章は、発信する人間も機会も極めて少なかったことを

思えば当然ですが、必ず作者の思考のフィルターを通した再構成、

つまりなんらかの美化や脚色が働いているものです。とあるが、

「なんらかの美化や脚色が働いている」のはなぜか。その説明と

して最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 自分の文章は、事実であることを重視し、実際の経験を表現したもの

のだということ、読者にわかりやすく伝えるため。

イ 自分の文章は、個人の意見ではなく、史実をもとにした客観的な文

章なのだとことを、読者に効果的に知らせるため。

ウ 自分の文章は、個人的な趣味を越えて、文化的に価値があるものな

のだということ、読者に疑いなく納得してもらうため。

エ 自分の文章は、自身の意見発表ではなく、公共的な価値観を共有す

るものなのだとことを、読者に理解してもらうため。

〔問3〕⁽³⁾ この一一段の、切りつめられた無駄のない文章のうちでは、「栗栖野」もまた、歌枕のごとき働きをしていると考えるべきです。とあるが、次の①②に答えよ。

① 「歌枕」とは本文中ではどのようなものだと説明されているか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 古くから繰り返し詠まれたために、ある特定の意味合いが人々に共有され定着した地名。

イ 古くから和歌に詠み込まれていた美しい自然と、それに関連する伝説が結びついた地名。

ウ 政治的な敗者が身を隠す場所として古くから使われ、さまざまな物語を帯びている地名。

エ 実際の地形が非常に特徴的であるために、古くから和歌で使われてきたある特定の地名。

② 歌枕としての「栗栖野」はどのような場所だと捉えられているか、次の文の空欄にあてはまる**十八字**の語句を本文中から抜き出して答えよ。

を持つ場所

〔問4〕⁽⁴⁾ さてそれでは、この段は、いったい何が言いたかったのでしょうか。とあるが、この段での兼好の真の思いとはどのようなものであったと筆者は捉えているか。その説明として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 俗世間から離れる遁世を理想としたものの、自身の限界を認識した上で、さらにそうした理想を完全に実現できる人間や生活は、現世では存在し得ないのだ、という思い。

イ 理想的な生活をしているように見えた草庵の主人が、実は自分の所有物を盗まれまいとする人物であったことを知り、人間は欲から逃れられないのだ、という思い。

ウ 栗栖野からさらに奥に入った秘境での生活を、住人と共に実際に体験した上で、俗世間から完全に離れた理想的な遁世は、現実には成し得ないのだ、という思い。

エ 栗栖野のさらに奥という山あいの秘境で、仏道に励みつつ誠実に生活を営む草庵の主人は、現世を超越した尊敬しうる理想的な人物なのだ、という思い。

〔問5〕 本文中の頼阿の和歌と同じ時候を詠んだ和歌を次のうちから選べ。

ア よし野山こずゑの花を見し日より心は身にもそはず成りにき
イ さみだれのそらなつかしくにほふかな花たち花に風やふくらん
ウ みよしの山かきくもり雪ふればふものさとはうち時雨れつつ
エ 庭の面はまだかわかぬに夕立のそらさりげなくすめる月かな

3
|
寺

国

五
日